

asarvasivādin, Mahāsaṃghika の六部派であるがその律の分類は共に波羅提木叉の註釋たる Vibhaṅga と佛教敎團の規則に關する Skandhaka なる二部分からなつてゐる。本書はその二部門の中の Skandhaka を選り出して Sarvasivādin, Dharmaguptaka, Mahāsaṃghika Pāli の四部派を對照してその相異と内容を摘出してゐる。

内容は六項目に分かれてゐる。即ち阿育王の傳導、一切有部と根本一切有部・スカンダカの起原、スカンダカ・テキストの構造と内容、古スカンダカ・テキストの原泉と初期佛教の傳統でありそれに更に現存律典の傳統と構造についてのアペンディックスを附加してゐる。

元來、原典を中心とした律典の研究は現代ヨーロッパで再び注目し出した。特にドイツに於て Walschmidt 等によつて整理出版の進んでゐるトウルファン發見の資料と共に一層その傾向を隆盛ならしめてゐる。既刊の Walschmidt の Catus parisaṣṭita の研究 (Alt- und Neu-Indische Studien 7, Hamburg Universitäts 1951) 或はハンブルグ大學・Dr.

Hamm による根本一切有部のスカンダカに所屬するチベット文 Pravarjāvastu の校訂と獨譯に關する長年の努力などとは間もなく未開の分野に寄與するところがあらう。

フラウワルナーがこうしたドイツに於ける律典研究と歩調を合せて該書を出版したことは現代ヨーロッパの新しい一つの傾向として注目すべきである。特に彼は上記各部派律典を單に内容比較よりのみでなく主として初期佛教敎團史といふ歴史の流れに於て浮び出さうとしてゐる著眼は律の研究上に於ける注目すべき意味の一つといつてよからう。

(Bespr. von Sasaki)

Friedrich Weller: Die Jenseits von Śunahśepa im Aitareyabrāhmaṇa und Saṅkhāyanaśrautasūtra, Akademie-Verlag, 1956.

ライプツヒヒの Weller 教授は印度學、佛教學特にチベットに關してはメンホフmann の Hofmann 教授と共に現代ヨーロッパを通じて最高峰を歩いてゐる。教授がこゝで Śunahśepa の歴史研究

に對しても亦、佛教學に對して用ひてゐると同じ基礎的なテキスト批判を以てする分析の方法を用ひてゐる。

Śunahśepa の歴史についての研究は既に百年間の諸學者の業績を生んだ。即ち Streiter, Roh, Weber, Böthingk, Keihn 等の諸先學である。然るにそこで用ひられて來た Aitareyabrāhmaṇa と Saṅkhāyanaśrautasūtra に出づる Śunahśepa の歴史に關するテキストの讀方については未だ決定的な正確さが不充分であつた。それに對して Weller 教授は兩種のテキストは何らか唯一のマヌスクリプトを基としたものであることを立證した。そこからして偈と長行とは同一著者に歸することが出来ないとなし更にアイタレーヤ・ブラフマナやシユラウタ、スートラに現はれてゐる傳記はリグヴェーダの偈と何らの關係もないことであるといふ。現存の長行は偈よりも新しい作品であるといふことをその結論の一つにあげてゐる。

Ākhyāna の敎理を研究するためにはこのやうなテキスト自體の分析が根本的に反省されなければならない。

## 目次内容

- A. Einleitung
- B. Die Erzählung von Śunahśepas  
Erlösung vom Opfertode
- C. Śunahśepas Opferung und die  
Königsweihe
- D. Das abgekürzte Śomaopfer.
- E. Die Geschichte von Śunahśepas  
Adoption und die Angelegenheit  
seines Erbes.
- F. Der Schlussabsatz der Gesamt-  
legende.
- G. Prosa und Vers.
  - 1. Die Verfasserfrage.
  - 2. Das zeitliche Verhältnis von  
Vers und Prosa.
- H. Zusammenfassung der Ergebnisse  
der Untersuchung  
(Besp. von Sakai)
- Helmuth von Glasenapp: Der  
Pfad zur Erleuchtung. Eugen Di-  
ederichs Verlag, Düsseldorf-Köln  
1956. 220 s., DM. 9,60

元來、ヨーロッパに於ける佛教研究はテキストの譯出に向けられるか或はテキストから自由な哲學的追及に向けられるかのいつれかであつた。最近の方向はテキストを中心とし而もそれを問題的に取上げてそれに哲學的體系を與へようとする方向をとつてゐる。

こうした操作は最も思辨的にして且つ文獻學的精密さを兼備したドイツ人學者のみよくなし能ふところの方法論である。

此のヨーロッパの新しい方向を代表するものはドイツから出た Frauwallner, Die philosophie des Buddhismus, Berlin 1956 と Glasenapp の上記の著作との二つである。

佛陀の眞の本質といふものは小乗佛教を背景となしつつ大乘經典ではドケティシニに或はテオモルフに論及せられた。さういつた佛陀の本質に關する思想的展開特にヒラルユシシユなテレオロギーはキリスト教と多くの類似點を持つものとしてヨーロッパの注意を引くのが常である。

グラーゼナップ博士は一定の教義即ち

四聖諦、十二因縁といふ普通あげられるデイスボザティオンのみにたよらないで問題的に古代の世界觀を批判しつつ叙述する。然も單なる叙述でなくテキストを中心となしそれにフットノートを附加し更に著者自身の註解を挿入せしめ佛教思想の哲學的位置付けを彫出しようとしてゐる。

普通、佛教を研究するにあたり、それを印度的諸宗教といふ廣汎な領域に於てとりあつかひそれとの聯關を問題にするのであるが——然も此の方面の研究さへ日本には多くない——さうした仕方が今や反省せられるに至つた。佛教を印度諸宗教の廣い領域内でとりあつかふといふ仕方は必ずしも佛教哲學に對する深い理解を必要とするものではなく、それなくしてもなし能ふであらう。然るに歴史的規定をはなれて生きた佛陀の精神を再生せしめるといふ觀點から取扱ふがこゝで試みられた。然もテキストを中心にした文獻的研究を基礎としてゐるといふ點に博士の從來の驚くべき諸著作と一線を畫した新しさがある。

外國文化に親しむものは誰でも先づな